

広大跡地利用を考える 「学生が闊歩する街“学都広島”の再建を！」

広大コロンブス 実行委員会 (広大跡地利用を考える会)

當任委員 山根進

広大跡地問題の経緯

昭和四八年二月八日、飯島学長は西条の地に広大移転を決定。この広大本部キャンパスは明治三十五年、文教の地を目指す市の用地寄付によつて広島高等師範学校が誘致されたことから始まる。

この時以来広島市は、「学都広島」として、戦前・戦後を通じて日本教育の拠点として位置づけられ、輝かしい歴史を大切に継承してきた。しかし、学都広島のコンセプトは現在の東広島市への広大移転で大きく後退。この時

点から広大跡地問題が始まった。それから二十二年。なんと二十二年間、広大跡地は利用案もないまま放置された。

一学部ずつの移転と学生の減少が続いた。地元商店街はその影響をもろにかかり、もう待てない、もう待てないなどと、一店一店と歯の抜け落ちるような閉店が続いている。明日の見えない千田に投資する者はおるはずもなく、今や「消店街」となってしまった。地元千田を中心に広大周辺部の学生街はじりつじりつとゴーストタウン化して



広大コロンブスの 見志

視点と基本的姿勢

研究成果をここに発表したいと思ふ

い。とても、このままでは市民の理解も地元千田さえも救えないと不評であつた。「また、公園か！」とか「公園で飯が食えるか！」の声がその代表である。

この遊創の杜構想を企画したメンバー自身、一般市民にはいつ、どこで、どのような基準で構成された委員会かも知られていない。協議会委員メンバーの顔ぶれを見ると、広島市長を会長に、広島県知事をはじめ県・市の両議会議長、学識経験者、地元財界人で構成されており、市民や地元住民の入るすき間もない。市民感覚も血の通つたものも感じられず、それゆえに、市民からは民意を無視した「密室の決定」との批判も多い。

身内で固めてよくよく検討し、合意の上発表された提案であつたはずであるが、半年もたたない九月には県から県立がんセンター構想が発表され、その候補地の一つに広大本部跡地が提示された。遊創の杜構想には県側も参加しており、がんセンターという全く違うコンセプトを広大跡地に提案することと自体真剣な討議がされてないし、県・市の合意なき遊創の杜計画発表であつたことの証明である。

計画を進める側の市にとって、これはまさに県の裏切り行為であり、その不調和は当然の如く表面化。マスコミにも叩かれ、その後は平行線のまま、早くも遊創の杜構想は暗礁に乗り上げ

緑化フェアーのため東千田公園(仮称)の地元説明会を開催。しかし、「公園だけが先に決定されるのはおかしい。何に使われるかの合意があつて、その後公園用地の位置決めが決定されるのが筋であり、順序が逆」との罵声にも似た反対意見の中で終わつた。市はその後、反対の声を知りつつも市の都市計画審議会を通過。県には公園用地の位置の一部変更の含みを盛り込むことでようやく通過する。

今年二月末から不信の中で解体工事が始まつた。瓦礫の山となつた広大跡地。学生の姿も声もなく、猫だけが残つた。この今までいいのか。良いはずがない。

広大コロンブスは広大跡地利用を考える会として、三年前に千田祭の一企画として生まれた。広大を愛する広大生を中心に千田商店街・市民で構成、運営されてきた。五回の公開討論会を主催し、広大生の声はもちろんのこと、地元住民・商店街・有志の市民の声や女性の声も集め、行政・マスコミにその声を届け続けている。この三年間の

二十一世紀は高度の国際化時代と見する。世界の中心軸は環大西洋から環太平洋に移り、いわゆるアジアの時代である。日本はその西域太平洋圏のリーダー国家としての重責を負うことになる。しかしながら、肥満化した現在の日本では機能しにくく、どうしても小ブロック化・地方分権が推進されしていく。この動きの中で、広島市は西日本ブロックの環瀬戸内海経済圏の首都としての機能を備え、その役割を果たさなければならぬ。

また、別の角度で二十一世紀を予見するなら、二十一世紀は食糧とエネルギーと情報の時代である。この中で達

を考察する際、三つの基本的姿勢を考慮することにしている。

が絶対条件である。そのためにも、国際交流と国際貢献の積極的姿勢が必要。この点で広島は有利であり、「二十世紀の広島の個性は「学都広島の歴史の継承と拡充強化」によって確立が十分可能である。

初の原爆投下によつて、広島は「世界のHIROSHIMA」となつた。五十年の歴史をもつ国際平和文化都市のメリットを最大限に活用すれば、広島発信の世界情報基地になりえる。情報を制する者が世界を制する。高度情報化時代を勝ち抜くためには、最先端のハイテク技術と質の良いネットワーク

の上発表された提案であつたはずであるが、半年もたたない九月には県から県立がんセンター構想が発表され、その候補地の一つに広大本部跡地が提示された。遊創の杜構想には県側も参加しており、がんセンターという全く違うコンセプトを広大跡地に提案することと自体真剣な討議がされてないし、県・市の合意なき遊創の杜計画発表であつたことの証明である。

計画を進める側の市にとって、これはまさに県の裏切り行為であり、その不調和は当然の如く表面化。マスコミにも叩かれ、その後は平行線のまま、早くも遊創の杜構想は暗礁に乗り上げ

広大コロンバスは広大跡地利用を考える会として、三年前に千田祭の一企画として生まれた。広大を愛する広大生を中心に千田商店街・市民で構成、運営されてきた。五回の公開討論会を主催し、広大生の声はもちろんのこと、地元住民・商店街・有志の市民の声や女性の声も集め、行政・マスコミにその声を届け続けている。この三年間の

在の日本では機能しにくくどうして
も小ブロック化・地方分権が推進され
ていく。この動きの中で、広島市は西
日本ブロックの環瀬戸内海経済圏の首
都としての機能を備え、その役割を果
たさなければならぬ。

また、別の角度で二十一世紀を予見
するなら、二十一世紀は食糧とエネル
ギーと情報の時代である。この中で達

